

係・副・間投三助詞の区別とその

高校教育における取り扱ひ方

— 続「助詞の分類」 —

土 肥 常 雄

はじめに

この文章は、高校生に、文語文法を指導する場合に、係助詞・副助詞・間投助詞を扱う時はどんな方法を用いたら、これらの性質の違いを最もよく理解させようだろうか、という問題について考えたものである。もっとも、必要に応じては口語文法にも触れている。

一
こんにち、高校の文語文法において、助詞は、普通どんなに分類されているだろうか。大きく言って、そこには、次のような二つの類型が見いだせる。

A型 格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞

B型 格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・間投助詞・終助詞

挙げられている種類数によって、前のを四種法、あとのを六種法と名づけることもできよう。四種法は、早く文部省著作の「中等文法 文語」(および「中等文法 口語」)に用いられた方法で、広く

知られている。六種法は、このいわゆる文部省文法が公にされてからのちに、次第に勢力を増してきた方法である。こんにち、高校の文語文法における助詞の分類法の支配的勢力となっている、と言つてもよいのが、この六種法である。

この六種法は、早く山田孝雄博士が「日本文法論」などで提唱された説に基づいている。口語の助詞分類法が、今もなお四種法を守るものが多い状態であるのにひきかえ、文語のそれは、すでに六種法を優勢とみなすべき状態に変わってきた、というところには、さまままの理由が考えられよう。

(一)「中等文法 文語」も、係結びの法則は無視しえず、その説明を終えたあとに、

右のように用いられる「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」「こそ」を係りの助詞ということがある。

と付記している。このような取り扱ひ方が、便利なるように見えなが

らも、さすがに何か煮えきらぬものを感じさせ、そうするほどなら、この五語に「は」「も」の二語を加えた七語を、山田博士の説にならって係助詞と名づけて特設したい、という考え方を強めたのかも知れない。こうなると、文語は、もともと係助詞の設定を必要とする運命を持っているのかも知れない、と思える。

(二)「中等文法 口語」は、助詞を次のような原理に基づいて分類したものでらしい。あらゆる口語助詞の中から、文末に付きうるものをまず抜き出して、終助詞とする。口語助詞の中にも、文中法と文末法とを兼ねうるもの、たとえば、

○ ソレハネ、タイヘンデシタヨ。

○ キョウハ、珍シク上天気ダネ。

○ 帰ッタラナ、ヨク相談シテゴラン。

○ ソレハ、残念ダッタナ。

などがあるが、これらも、「とにかく文末には付きうる」助詞という条件には当てはまるものだから、終助詞に入れうる。口語助詞の「カ」は、文部省文法では、

○ ドウシタノカ、ソノ子ハ急ニ泣キダシタ。

○ 前モ見タイカ。

のようなものを終助詞としているから、別に問題は生じないものと考えられているのであろう。(ただし、この「カ」のような助詞については、私は、その取り扱い方に疑問を持っている。後述することにした。) ところで終助詞を抜き出したあと、残りの助詞の中から、主に体言のあとに付きうる格助詞と、主に活用語のあとに付きうる接続助詞とを抜き出す。そうして最後に残ったものを副助詞とする。右の

ような分類原理が考えられて、あのような四種法が採用されたのであろう。

ところで、文語助詞を、口語助詞の右のような原理に準じて四種類に分けようとする時、「中等文法 文語」の助詞分類は、大きな障害を持っていることがわかる。あらゆる文語助詞の中から、文末に付きうる助詞をまず抜き出すと、「中等文法 文語」の終助詞が得られるはずである。が、その中に、

○ などて、かくは、するぞ。

○ 樂しからずや。

○ かの扇を射おとす者は、無きか。

のような語が含まれてくる。そして、これらを、文部省文法は、副助詞(の二用法)だとしている。こうなると、高校生は、これらを「文末に付きえているのに、なぜ終助詞としないのか。」と疑うだろう。

さらに、次のような問題もある。文部省文法は、感動を表わす「や」「な」「よ」を終助詞としているが、これらの文中法には触れていない。

○ あな、うれしや。

○ せみの声聞けば悲しな。

○ 少納言よ、香烟峯の雪はいかならむ。

のような例を挙げてゐる。だが、高校生は、このうちの「な」「よ」は別としても、「や」については、その文中法を見る機会を、必ず持っていると思う。

○ 石見のや、高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか。

○ ほととぎす鳴くや、五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするか

な。

これらを学んで、「や」が文中・文末両法を兼ねうることを知るだろう。やがて、「な」「よ」についても、それを知るだろう。しかも、「中等文法 口語」は、同じく感動を表わす口語助詞「ネ」「サ」二語に（この「ネ」「サ」を終助詞に入れながらも）文中・文末両法を兼ねさせて、次のような例を挙げてゐる。

○ ソレハネ、タイヘンデシタヨ。

○ キョウハ珍シク勉強シテルネ。

○ 勉強スルサ。

○ ソレガサ、ウマク行カナインダヨ。

これらを見合わせて、高校生は、同じように文中・文末両法を兼ねうる助詞でありながら、なぜ、「係りの助詞」の「ぞ」「や」「か」は副助詞に属し、感動を表わす「や」は終助詞に属するのか、と疑うだろう。

「中等文法 文語」は、「は」「も」二助詞を、その文中法だけを例示し（文末法には触れないで）、副助詞に入れている。「は」「も」の文末法は、一般に認められており、高校生も接する機会を、かなり持っているはずのものである。「は」「も」に文中・文末両法を認める人は、一般に、助詞を幾種に分かつて、これを終助詞とせず、文中助詞（係助詞または副助詞）としている。文部省文法も、もし「は」「も」に文末法を兼ねさせるとしたら、この二助詞を、終助詞とはせず、やはり副助詞としたであらう。高校生は、同じく文中・文末両法を兼ねうるにもかかわらず、なぜ「は」「も」や「係りの助詞」とも呼ばれる「ぞ」「や」「か」は副助詞でなければならず、感動の「や」「な」「よ」は終助詞でなければ

ならないのかを疑うだろう。これが、「中等文法 文語」の助詞分類に含まれている大きな障害だ、と思う。

山田博士は、「は」「も」「なむ」「こそ」に禁止を表わす「な」および「係りの助詞」の「ぞ」「や」「か」を加えた八語を係助詞と名づけ、「や」「よ」「を」「な」などすべて感動だけを表わす語を、まとめて間投助詞と名づけられた。したがって高校生の疑問に答えるには、結局、文語助詞の分類については、山田博士の係助詞・間投助詞の二種類の区別を論ずることも必要となり、それはいきおい、四種法にはその名称の出でこない係・間投二助詞の名称を、表面に押し出すのと同じ結果となってしまう。

六種法が優勢となってきた理由としては、右のようなことも考えられよう。

二

文語助詞の分類法には、以上のように、大きな障害が横たわっている。文語助詞の分類法は、分類数の比較的に少ない「中等文法 文語」の四種法にも、すでに大きな難関が横たわっていると言える。一つの規範となったとも言われている「中等文法 文語」の方法も、山田博士の唱えられた六種法と、実質的には何程の隔たりもないものだ、と言える。そこで、こんにち最も普及している「文語助詞の六種分類法」を理解しうる方法を考えてみよう。問題は、六種法の係・副・間投三助詞の区別をつかむ方法にあり、これが理解できれば六種法が四種法よりすぐれていよう。

私は、次のように考えている。あらゆる文語助詞の中から、文末だけに用いられ、文末だけに用いられ、文中にはけっして用いられない語を抜き出して、終助詞とする。終助詞を抜き出した残りの語の中から、主に体言のあとに付きうる格助詞と、主に活用語のあとに付きうる接続助詞とを抜き出す。こうしたあとに残るものは、係・副・間投の三種の助詞の混合体である。この混合体の中から、同じ語でありながら文中法と文末法とを兼ねうる助詞ばかりを抜き出す。得られるものは、係助詞と間投助詞との混合体である。その残りは、副助詞となる。副助詞は、文中だけに用いられ、けっして文末には用いられない助詞ばかりとなっているはずである。

右の、文中・文末両法を兼ねうる助詞の中に係助詞が含まれているという考え方には、異論があるかもしれない。と言うのは、私の言う係助詞「は」「も」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」(および禁止の「な」「の」のうち、「なむ」「こそ」二助詞には、普通には文末法が認められていないからである。

○ 雲だにも心あらなむ。

○ うぐひすの待ちがてにせし梅が花散らずありこそ。思ふ子がた

め
などは、普通、終助詞とみなされている。山田博士は、係助詞のすべて「は」「も」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」「な」「こそ」二助詞も、次のような考え方に立てば、文中・文末両法を兼ねうる機能を認めうるのではないか。

「なむ」「こそ」が、文中法のものと同様に文末法のもので別種の助詞とみなされている理由は、この二助詞がいずれも、文中では感動を表わすのに、文末では希望を表わすものだ、という点にあるのだろう。ところで、これらと同じ係助詞の「は」「も」「ぞ」は、文中法と文末法とで、表わす文法的意味が同じである一面と、異なっている一面とを持っている。すなわち、「は」は文中に用いられた場合に、区別を表わすこともあるし、感動を表わすこともある。区別を表わす例には、

○ 夕されば小倉の山に鳴く鹿はこよひは鳴かず。寝ねにけらしも。

などがある。感動を表わす例には、

○ いとほしく見ゆれど、心ざしはせむとす。

などがある。ところが、この助詞は、文末に用いられると、

○ 殿上人、みな見てしは。

のように感動だけを表わす。こうして、文中・文末でともに感動を表わす点から、「は」に文中・文末両法を兼ねうる機能を認めうる。その「は」が、実は見方を変えると、文中では感動以外に区別をも表わしうるのに、文末では感動しか表わしえず、文中法と文末法とで、厳密には表わす意味を異にしている。このような「は」が、一般に係助詞と認められ、文中・文末両法を兼ねうるものとみなされている以上、文中法と文末法とで表わす文法的意味の異なる「なむ」「こそ」二助詞もまた、係助詞であり、文中・文末両法を兼ねうるもの、とされてよいはずである。

係助詞の「も」「ぞ」についても、「は」の場合と同じことが言える。「も」は、文中・文末にあつては感動を表わし、しかも文中

で並列を表わしうる。

○ いともかしこし。

○ 情こころ悲しむ。

○ 就田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ。今は榜はしぎ出で

な。

「ぞ」は、文中・文末で感動を表わし、しかも文末では断定を表わしうるとされている。

○ 月づき経へにける。

○ その彼の母も吾を待つらむぞ。

○ うましうまし閑ひまぞ。

このように、「も」「ぞ」も、文中・文末両法を兼ねうる助詞とみなすことができる。が、文中と文末とで表わす文法的意味を、厳密に言えば、異にしている。

係助詞の「や」「か」（および禁止の「な」）は、文中・文末で表わす文法的意味が同じだから、容易に文中・文末両法を兼ねる機能を認めうる。こうして、係助詞に属するすべての語に文中・文末両法を兼ねさせうる。

さらに間投助詞も、感動を表わす「し」を除けば、すべての語が文中・文末とともに感動だけを表わすから、容易にその文中・文末両法を兼ねる機能を認めうる。（感動を表わす「し」を、山田博士は間投助詞とみなされた。が、私はこの語が文末法を持っていない点を考えて、これを六種法の副助詞に入れた。）

以上のような考え方に立てば、「なむ」「こそ」を含むすべての係助詞、およびすべての間投助詞に、文中・文末両法を兼ねる機能を認めることができ、したがって、係・間投の二助詞を、副助詞と

区別しうるであろう。

四

右のようにして得られた副助詞の中には、「だに」「すら」「さへ」「し」「のみ」「ばかり」「まで」「など」のような語が属するものと考えるが、これらのすべてをけっして文末には付きえない助詞だと決めると、「のみ」「ばかり」の二語を疑う者もあるう。

と言うのは、「のみ」は高校生の学ぶ漢文に、文末に付くことば（すなわち、漢文法に言う「終尾詞」）として、しばしば現れているからである。

○ レ是レ可レ謂レ之ヲ善ク慮ス三子孫ヲ已ム。（ソレコソ、ヨク子孫ノコトヲ考エ

ルモノト言ツテヨイノダ。）

このような「のみ」を、山田博士は「漢文の訓読によりて伝へられたる語法」の中で、これは漢文訓読の場合や、その影響を受けた文などにだけ見られるものであって、純粹の国文の中には絶えて見られない、と説いておられる。高校生が「のみ」（副助詞）を文末にも用いられる、と考えても、むりだとは言えまい。これは、次のように考えてはどうか。

「のみ」は漢文訓読の語法としては、文末で感動だけを表わすことがある。だが、漢文訓読の場合でも、文末で限定を表わし、断定の助動詞をそのあとに補う例がある。

○ 学問之道無レ他。求ム其レ放心ニ而已ト矣。（タダソノ迷ゲタ本心ヲ

求メテ、ワガ身ニシツカリツケルコトダケダ。）

しかも、日本の純粹古典に見える「のみ」は、文中では、

○ レ是レ可レ謂レ之ヲ善ク慮ス三子孫ヲ已ム。（ソレコソ、ヨク子孫ノコトヲ考エ

ルモノト言ツテヨイノダ。）

このように「のみ」を、山田博士は「漢文の訓読によりて伝へられたる語法」の中で、これは漢文訓読の場合や、その影響を受けた文などにだけ見られるものであって、純粹の国文の中には絶えて見られない、と説いておられる。高校生が「のみ」（副助詞）を文末にも用いられる、と考えても、むりだとは言えまい。これは、次のように考えてはどうか。

「のみ」は漢文訓読の語法としては、文末で感動だけを表わすことがある。だが、漢文訓読の場合でも、文末で限定を表わし、断定の助動詞をそのあとに補う例がある。

○ 学問之道無レ他。求ム其レ放心ニ而已ト矣。（タダソノ迷ゲタ本心ヲ

求メテ、ワガ身ニシツカリツケルコトダケダ。）

しかも、日本の純粹古典に見える「のみ」は、文中では、

○ レ是レ可レ謂レ之ヲ善ク慮ス三子孫ヲ已ム。（ソレコソ、ヨク子孫ノコトヲ考エ

ルモノト言ツテヨイノダ。）

このように「のみ」を、山田博士は「漢文の訓読によりて伝へられたる語法」の中で、これは漢文訓読の場合や、その影響を受けた文などにだけ見られるものであって、純粹の国文の中には絶えて見られない、と説いておられる。高校生が「のみ」（副助詞）を文末にも用いられる、と考えても、むりだとは言えまい。これは、次のように考えてはどうか。

「のみ」は漢文訓読の語法としては、文末で感動だけを表わすことがある。だが、漢文訓読の場合でも、文末で限定を表わし、断定の助動詞をそのあとに補う例がある。

○ 学問之道無レ他。求ム其レ放心ニ而已ト矣。（タダソノ迷ゲタ本心ヲ

求メテ、ワガ身ニシツカリツケルコトダケダ。）

しかも、日本の純粹古典に見える「のみ」は、文中では、

○ レ是レ可レ謂レ之ヲ善ク慮ス三子孫ヲ已ム。（ソレコソ、ヨク子孫ノコトヲ考エ

○ 新しき春さへ近くなりゆけば降りのみまさる年の雪かなのように感動をも表わしうるが、一見文末法らしい「のみ」は、みな口語の「ダケ」「バカリ」に当たり、限定の意を表わす。ゆえにもし「のみ」が文末に用いられる語ならば、

○ うち日さす宮道みやみちを入は満ち行けどわが念ふ公きみはただ一人のみを解釈する時、文末部は「タダ一人デアルダケ」。「タダ一人ダケ」。「タダ一人デスダケ」。「ような解釈が成り立つはずである。だが、実際は、「タダ一人ダケデアル」。「タダ一人ダケダ」。「タダ一人ダケデス」のような解釈しか成り立たない。「のみ」のあとに断定表現を補足してはじめて、解釈が成り立つ。日本の純粹古典に見える「のみ」は、たとい文末にあるように見えるものでも、文末に用いられているのではない、と言えるであろう。近代の文語文にも、

○ 之を戒慎けいしんすること今日の要務なれと云ふのみ。のように、文末にあつて感動を表わすものがあるが、漢文訓読の語法の影響によるものだ、と言われている。

「ばかり」も、右の「のみ」と同じような問題を持っている。すなわち、

○ 春はただ花のひとつへに咲くばかりもののおはれは秋ぞまされるは限定を表わして、「のみ」の場合に述べたのと同じように、「咲クダケデアル。」とは解釈できても、「咲クデアルダケ。」は成り立たない、と言える。

○ さ寝ねらくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如は、程度を表わし、口語助詞の「ホド」「クライ」に当たる。「玉

ノ緒デスホド」。「玉ノ緒ダクライ。」とは訳せず、どうしても「玉ノ緒ホドデス」。「玉ノ緒クライダ。」とすべきである。「ばかり」も、文末法を持ちえない語だ、と言えよう。

五

これまでに述べたことから、文語では、係助詞・間投助詞の二種は、文中・文末両法兼ねうる語だから成り、副助詞は文中法だけを持つ語から成っている、と言える。

そこで、次には、同じように文中・文末両法を兼ねうる係・間投二助詞の区別法を考えよう。語源論によれば、係助詞の「や」の起源は間投助詞の「や」だ、と言う。また、間投助詞は感動を表わす語であるが、係助詞も、「は」「も」「ぞ」「なむ」「こそ」などは感動を表わしうる。さらに、「は」「も」が文中にあると、結びは原則として終止形になる。結びが終止形になるのは、「花 美し。」のような場合もそうであつて、係助詞の特殊機能のためだとは考えられない、とし、「は」「も」は係助詞ではない、と説く人もいる。なおまた、間投助詞「を」を、文末に希望・意志・命令などの表現を要求して、

○ 楽しくをあらな。

のように用いられる点に着目し、係助詞だとする説もある。このように、係・間投の二助詞は、もともときわめて混同されやすい。普通、高校用の文法教科書などは、間投助詞を、

文節の終わりに付いて、語勢を強め、または感動を表わす助詞と説明しており、次のような例を挙げている。

○ こよなうのどけしや。

○ 箱根路をわが越え来れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ。

○ 枝も情なげなめる花を。

○ 生ける者つひにも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあらな。

しかも、高校用の文法教科書などは、一般に係助詞を説いても、終止形で結ぶのを原則とする問題の助詞「は」「も」の陳述制約機能を、ほとんど具体的には述べていない。このような状態で高校生が、よく係・間投二助詞の性質の違いを理解しうるだろうか。

係助詞は、「は」「も」二語の心理的陳述制約機能が相当に難解なので、これを間投助詞と区別するためには、どうしても両者の形式的特質の違いを考えなくてはなるまい。間投助詞は、文末で命令形のもとに付きうる。このことを強調したい。

○ 声絶えず鳴けや。うぐひす。ひととせにふたたびとだに來べき春かは。

○ さりととも、あこはわが子にてをあれよ。

○ 「渡り守。船渡、せを。」と呼ぶことの聞えねばかも 楫の音のせぬ。

○ さびしさにたへたる人のまたもあれな。庵ならべむ。冬のお山ざと。

このような機能は、係助詞にも副助詞にも、まったく見られない。しかも、高校生の学ぶ古典教材に現れる間投助詞は、だいたいこの四語の範囲を出ない、と言える。間投助詞の、この機能を強調しないと、係・間投二助詞の区別は、生徒にはついに理解できない。

(間投助詞「や」には、連体格文節のあとに付きうる——「きりぎ

りす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む。」のような用法があるが、このような用法は、間投助詞の「な」には全然見られず、上代のわずかな例を除いては「よ」「を」にも、一般には見いだせない。したがって、このような用法は、残念ながら間投助詞に普遍的なものとは認めにくい。) ついでながら、口語の間投助詞も、文末で命令形のあとに付きうる。

○ 健夫サンハ、モウ五年生ダカラ、ナンデモヨウク考エテク、ダサイネ。

○ 野球ニデモ連レテ行ッテモライナ、サイナ。

(口語の「サ」「ヨ」をも間投助詞とする説がある。が、私は、この二語の文中法には、共通語の表現としては疑問を持っている。私は、「サ」「ヨ」を、もっぱら文末にのみ用いられる終助詞とみなしたい。「ネ」「ナ」は、共通語を対象とする口語文法で、間投助詞としうる、と考えている。)

六

以上のように私は、文語助詞を分類するには、まず終助詞を、次には格助詞・接続助詞を抜き出し、あとに残った助詞から、文中・文末両法を兼ねうる助詞を抜き出す。こうして最後に残った助詞は、文中法だけを持つ副助詞となっている。さて文中・文末両法を兼ねうる助詞は、さらに文末で命令形のあとに付きうる間投助詞と、その不可能な係助詞とに二分する。この方法を用いたい。こうすれば、現行の六種分類法を、高校生も理論的に納得できると思う。(こうして得られた間投助詞は、文中・文末両法を兼ねうる語

だけから成っており、しかも願する語のすべてが感動だけを表わしうる助詞となっている。

が、こうして六種法が理解できても、「中等文法 文語」の四種法は、なお高校生には理解しにくいだろう。四種法は、同じく文中・文末両法兼ねうる係・間投の二助詞を、区別して、前者には副助詞を、後者には終助詞を合体させている。この取り扱い方も高校生には理解しにくく、係・間投二助詞には性質に違いがあるとしても、なぜその逆の係・終二助詞合体説や、副・間投二助詞合体説が認められていないのかを疑問とするだろう。この点からみて、文語助詞の分類法は、四種法よりもむしろ六種法のほうが、すぐれているのではないか、と思う。

七

係助詞と副助詞とを形式的特質に着目して区別する方法には、もう一つ次のようなものがある。これらの助詞が格助詞と重なる時には、係助詞は格助詞の前に立ちえないが、副助詞は格助詞の前に立ちうる、という考え方から出た方法である。が、これは「だに」「すら」「さへ」の三語を係助詞に入れた時だけに適用できる方法であって、これらか副助詞に入れた時には適用できない。「だに」「すら」「さへ」は、高校の古典教材の中に、格助詞の前に立っている例がほとんどない。「だに」は、山田孝雄博士も格助詞の前には立ちえないと述べられた。「すらに」「さへに」の例を高校生が見るとしても、これらに含まれている「に」を、格助詞ではなく間投助詞だとする説がある。しかも、こんにちの高校用の文法教科書

などでは、係助詞を「は」「も」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」の七語とし、副助詞を「だに」「すら」「さへ」「し」「のみ」「ばかり」「まで」「など」の入語としたものが多い。これでは、この方法は、あきらめなくてはなるまい。

八

現行の高校用の文法教科書は、助詞を山田博士の説に準じて六種類に分類したものが、実に大きな勢力をえている。しかも、それは係助詞の「なむ」「こそ」に文末法を兼ねさせず、「だに」「すら」「さへ」の三語を副助詞に入れている。たとい「なむ」「こそ」に文末法を兼ねさせないでも、その際に、もし「だに」「すら」「さへ」を係助詞に入れておけば、格助詞の前に立ちうるか否かという形式的特質面から係・副二助詞を区別することもできよう。だが、「なむ」「こそ」に文末法を兼ねさせない上に、「だに」「すら」「さへ」を副助詞に入れたのでは、高校生は係・副二助詞の区別を、形式的特質面から理解することはできない。形式的特質面からの理解を封じてしまうと、残るのは心理的特質面からの直感的なつかみ方だけとなり、これは高校生には不可能だろう。

以上、私が述べたのは、現行文法における助詞分類の六種法を（特に係・副・間投三助詞の区別を問題として）、形式的特質から理解する方法である。この方法は、山田博士の分類原理を形式的にかもろとしたことにもなるが、高校生が将来その心理的方法に立ち入ろうとしても、その道を妨げることはなるまい。高校の文法を、『納得のいくもの』にするための試みとして提案したのである。

なお、私の提案した文語助詞の分類法は、口語助詞の分類法にも適用したい。まず、あらゆる口語助詞の中から、文末だけに付きうる終助詞を抜き出す。残りの語の中から、主に体言のあとに付きうる格助詞と、主に活用語のあとに付きうる接続助詞とを抜き出す。さらに残った助詞の中から文中・文末両法を兼ねうる係・間投二助詞を抜き出す。最後に残ったものが、文中だけに付きうる副助詞である。係・間投二助詞の混合体を、さらに文末で命令形のあとに付きうる間投助詞と、その不可能な係助詞とに分けて、以上六種を設定するのである。

係・間投二助詞の混合体の中には、次のような語が含まれるのは、言うまでもない。

- ソレハ_レ、タイヘンデシタヨ。
 - キョウハ、珍シク上天気ダ_レ。
 - 帰ッタ_ラ、ヨク相談シテゴラン。
 - ソレハ、残念ダッタ_ナ。
 - ヨウク考エテク、ダ、サイ、レ。
 - 連レテ行ッテモライナ、サイ、ナ。
- のように命令形のもとにも付きうるので、文語の場合から見て間投助詞としうる。ところが、右の混合体の中に、別に
- スグニ帰ッテ来ル_カ、ドウ_カ、ハッキリシナイヨ。
 - 山本ハドウナッタ_ヤ、トント様子ガワカラナイ。

○ ダレダッタカシラ、ソナコトヲ言ッテイタ人ガ、イマンタネ。のよらかな語を入れてはどうか。これらの右のような用法は、文中法か文末法か、きわめて紛らわしい。「中等文法 口語」は、「カ」については文中法と文末法とを、この稿のはじめに記したような例を挙げて明確に区別しており、「ヤラ」については、

○ 珍シイヤラ、楽シイヤラ、マルデ夢ノヨウダ。

などの例を挙げているのみで、文末の「ヤラ」には終助詞の中でも触れていない。「カシラ」は、全然とりあげていない。が、この「カ」「ヤラ」「カシラ」は、文中にあるものか、文末にあるものか、きわめて紛らわしい場合が実に多く、口語においても間投助詞以外に文中・文末両法を兼ねうる助詞を認めてよいはずだから、文中・文末両法を兼ねうる助詞とみなしたい。そうした場合は、「ハ」にも、この語が、

○ 私ハ、存ジマセン。

○ 私ハ、存ジマセンハ。

のように用いられるから、文中・文末両法を兼ねさせらるるであろう。文末の「ハ」は、普通、「ワ」と替かれ、終助詞と認められているが、山田博士はこれをも「ハ」に還元して係助詞「ハ」の文末法としておられる。さらに、文中の「ハ」は発音どおりに「ワ」と書いても一概に否定できないはずで、もし、

○ 私ワ、存ジマセン。

○ 私、存ジマセンワ。

の二例を比べるなら、これは同一語の二用法だと認めてよさそうに思える。

「カ」「ヤラ」「カシラ」「ハ」を、文中、文末両法を兼ねうる

ものと認めた場合は、これらは命令形のあとには付きえないから、文語の場合に準じて係助詞とみなさなくてはならない。口語助詞の中で文中・文末両法を兼ねうる助詞は、右に述べた間投助詞の「ネ」「ナ」および係助詞の「カ」「ヤラ」「カシラ」「ハ」にとどまると言つてよく、副助詞の「モ」「コソ」「サエ」「デモ」「ダツテ」「シカ」「ホカ」「ナリト」「ナリ」「マデ」「バカリ」「ダケ」「キリ」「ホド」「グライ」「ナド」「ズツ」「ドコロ」などは文末法を持ちえない。口語助詞を、文語助詞の六種法にならつて分類すれば、以上のようになる。が、一般には、口語では、係助詞を「バ」「モ」「コソ」「サエ」「デモ」「ダツテ」「シカ」などとし、副助詞を「カ」「ヤラ」「カシラ」「ナリ」「マデ」「バカリ」「ナド」「ダケ」などとしている。一般の説に従えば、口語では係・副二助詞を、格助詞の前に立ちうるか否かによつて區別することとなり、私の提案したような形式的特質面からの分類法を守る限り、文語・口語にあい通ずる分類原理は、格・接続・副・間投・終助詞の五種に分類するところまでが限度であり（この場合は係助詞と副助詞を一括して副助詞とする。）、係助詞の設定けもはや困難となる。右の一般の説を固守すれば、口語と文語とを通じて係助詞を立てうるのは、係助詞の本質を心理的に理解することが高校・中学生に可能だとみなされた時だけだろう。

（広島市立舟入高等学校教諭）